

Title	イスラームをめぐる共生のオート／エスノグラフィー —日本人ムスリムの改宗プロセスと社会実践研究を通じた「私たち」の拡張—
Author(s)	桂, 悠介
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/98088
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏名 (桂 悠介)

論文題名

イスラームをめぐる共生のオート／エスノグラフィー
 ー日本人ムスリムの改宗プロセスと社会实践研究を通した「私たち」の拡張ー

論文内容の要旨

本論文では共生学の立場から、1980年代以降の日本人ムスリムの改宗プロセスと日常的、社会的実践の諸相を明らかにし、「日本人」や日本社会の今日的变化の一端を示す。これにより学術的、公共的言説における自己及び他者認識を問い直し、「私たち」が指し示す範囲を、内実を伴う形で拡張することの可能性を論じる。こうした「私たち」の拡張は、潜在的なものも含めた排外主義に対する対抗言説となるとともに、言説にとどまらない実践の起点となるという意味で、共生の根本的な条件の一つとなる。本論文は以下の三部からなる。

第一部「『学』としての共生」では、共生を学術的に論じるための前提に関わる議論を行う。第1章では、今日の共生学の課題は、表面的ではない議論と実践を行うことで、「共生」への批判に応答していくことであると指摘する。第2章では、これまでの共生思想を、棲み分け共生論、リベラル共生論、共同共生論、省察ー変容共生論の四つに整理した上で、それらを既存の共生モデルと結びつけ、新たに「多層的共生モデル」を提示する。第3章では本論文を研究者自身の経験をも議論の俎上に載せる、省察ー変容共生論に位置づけることを述べる。

第二部「イスラームをめぐる共生の課題」では、先行研究の整理を通して、本論文の主題と問題の所在を明確化する。第4章ではまず、イスラームにかかわるグローバル、国家、地域、相互作用レベルの課題や表象の問題が相互に関連していることを示す。次いで諸問題の根底には、公共的、学術的言説における「私たち」という自己認識と「イスラーム」という他者認識を形成する多重の境界線が存在することを指摘する。第5章では、それらの境界線を相対化うるアプローチとして、改宗ムスリム研究、とりわけ従来の研究では十分に捉えられてこなかった、改宗に至るプロセスを焦点化することに可能性があることを論じる。その上で第三部の具体的な調査に向けて、欧米の先行研究から「道具的／非道具的」改宗、「知的／関係的」改宗といった分析視点を導出する。また、改宗プロセスを単純な要因に還元しないために「マジョリティの有徴化」、「混淆」、「内発的世界の創発」という三つの概念を用いることを述べる。

第三部「日本人ムスリムの改宗プロセスと社会的実践」では、実際の調査結果から、改宗プロセスの詳細と、改宗後の周囲との関係、日常的・社会的実践の諸相を明らかにする。第6章では、入信記分析、インタビュー、オートエスノグラフィー、対話研究という本研究の多元的な方法論について説明する。第7章から第11章では改宗に至るまでのプロセスを詳述する。まず第7章で、改宗者の改宗前の信念、信仰やイスラーム・イメージなどの背景を明確化する。第8章では、ムスリムとの交流やイスラーム社会への渡航など関係性にかかわる経験、第9章では読書やインターネットでの学び、議論など知識にかかわる経験の内実を示す。第10章では、改宗者のももとの関心や疑問とイスラームの社会的、哲学的、科学的、神学的側面との結びつきや、改宗の契機について論じる。第11章ではオートエスノグラフィーの記述により、グローバルな出来事と改宗プロセスにおける諸経験の複雑な連関を示す。第12章から第14章では改宗後の経験を焦点化する。第12章では、改宗後の家族や職場等での関係性やムスリム・コミュニティの役割、日本社会への発信などの社会的実践を取り上げ、改宗者が主流社会とイスラーム、ムスリム・コミュニティのメディアーターとなっていることを指摘する。第13章ではムスリムと地域住民との対話や交流といった実践が、新たな交流の機会や関係性の構築の契機となることを論じる。最後に第14章で、ここまでの議論を、戦後の日本社会というより長い時間的な流れの中に位置づけることで、個々人の変容と社会の変容の関係を考察する。

これらを通して、ある社会においてマジョリティとされる人々の根源的な変容が、個人的、社会的な関係性の創発へとつながり、既存の自己認識と他者認識の問い直し、ひいては主流社会において自明視される「私たち」という認識の拡張をもたらしうることを示す。こうして拡張される「私たち」とは矛盾や対立を内包しつつも、実質的な内実を伴う集合的な自己認識や関係性であり、この意味での「私たち」を具現化していくことが、多様な信念や信仰を持つ人々の共生に不可欠な条件となると結論づける。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (桂 悠 介)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	千葉 泉
	副 査	教授	稲場 圭信
	副 査	教授	岡部 美香

論文審査の結果の要旨

本論文は、共生学に関する先行研究から導出した「省察—変容共生論」の立場から、文献研究、オートエスノグラフィ、インタビュー、アクションリサーチなど多角的な方法を用い、従来の研究では捉えられていなかった日本における1980年代以降のイスラームへの改宗の諸相を明らかにすることで、学術的・公共的言説における自己認識や他者認識を問い直し、共生を論じ実践するための根元的な条件として、自他の間の多重の境界を相対化しつつも、単一の規範や関係性に還元されない「矛盾や対立を内包する私たち」という集合的自己意識を、実質的な内実とともに形成することの重要性を提起した。

本論文は三部から成る。まず第一部では、共生を学術的に論じるための基層的な議論が展開される。第1章で共生学の現状と課題について論じたあと、第2章において1980年代以降の共生思想を4つの潮流に整理し、それらを組み合わせた多層的共生モデルが提示される。そして第3章では、本論文が「省察—変容共生論」の立場に位置付けられる旨が示される。次に、第二部では具体的な問題の所在とその克服の方法が明示される。第4章で、イスラームをめぐるマイクロからマクロなレベルにわたる課題や先行研究を検討することで、公共的言説における自己認識と他者認識の間の多重の境界線が、諸課題の根源的な問題として存在することを示唆し、第5章では、そうした問題にアプローチするために、「改宗ムスリム」の実践や改宗プロセスに着目することの可能性と先行研究の欠如が指摘される。そして、第三部では、今日の日本人ムスリムの改宗プロセスと改宗後の日常的・社会的実践の諸相が明らかにされる。第6章では、改宗過程の経験と省察を捉えるための方法論が説明され、第7章から11章にかけて、文献調査およびインタビューの結果から、先行研究で指摘されていた「結婚」や宗教的な関心だけではなく、グローバルな人や情報の移動における偶発的な出会いや哲学的な思索、社会的規範に対する関心・疑問とイスラームとの漸次的な関連付けも、改宗にいたる重要な要因であることが論じられる。まず第7章で改宗前の信仰、信念や、イスラームに対するイメージ、改宗時の職業などの背景、第8章で交流や海外渡航などのムスリムとの関係性にかかわる経験、そして第9章で読書や議論など知的な経験の内実が示される。そして第10章で改宗に至る契機が焦点化され、第11章では申請者自身のオートエスノグラフィから個人的な諸経験と社会的出来事の複雑な連関が示される。第12章から14章では、改宗後の経験に着目し、改宗者が日本の主流社会とイスラームの媒介的存在となり、新たな社会関係性の構築に寄与している実態が明示される。まず第12章で、改宗後の家族や職場等での関係性やムスリムコミュニティの役割、そして日本社会への発信などの社会的実践を取り上げる。また、第13章では地域におけるムスリムと地域住民との対話や交流が新たな実践や教育、交流などの関係性の創発に繋がること示される。最後に第14章で、ここまで論じた内容を戦後日本社会のより長い時間的潮流の中に位置づけることで、個人の変容と社会の変容との関係が考察される。これらを通して、ある社会でマジョリティとされる人々の根源的な変容が個人的・社会的な関係性の創発へと繋がり、既存の自己認識と他者認識の問い直し、ひいては主流社会において自明視される「私たち」という認識の拡張をもたらすことが示される。こうして拡張される「私たち」とは、矛盾や対立を内包しつつも実質的な内実を伴う集合的な自己認識や関係性であり、この意味での「私たち」を社会的に具現化していくことが、多様な信念や信仰を持つ人々の共生に不可欠な条件となると結論づける。

以上のように、日本におけるイスラームへの改宗という具体的なテーマを通じ、共生の根元的な課題に取り組んだ本論文は、先行研究において十分に意識されないまま再生産されてきた表象や構造的な問題にメタ的かつ内在的にアプローチし、社会的分断をもたらす課題に対する言説や実践の起点を提起する、独自性に富んだ意欲的な労作である。共生学および人間科学における研究の射程の拡大に貢献するものであり、その学術的意義は高く評価できる。論文審査の結果、本論文は博士(人間科学)の学位を授与するにふさわしいものと判定した。